

## 一六二六年、日本イエズス会士のトンキン報告書

五野井 隆 史

トンキンにおけるキリスト教の初期布教に関する史料については、すでに拙稿「イエズス会日本管区によるトンキン布教の始まり」(『史学』第六〇巻四号)において言及したところであるが、特に、一六二六年にトンキンに赴いてキリスト教開教の可能性について調査を試みたイタリア人バードレ、ジュリアーノ・バルディノッチ<sup>(1)</sup>と、彼に随行した日本人イルマン、古賀ジュリオ・ピアニ<sup>(2)</sup>の両報告書については、その原文や写本の所在、それらの報告書から知られる彼等一行の旅行やトンキンにおける動静、トンキンの政治や宗教等について簡単な紹介を行なった。

両報告書の写本については、前記拙稿においてリスボン市所在のアジエダ図書館 Biblioteca da Ajuda 所蔵の写本集「ジェズイタス・ナ・アジア *Jesus na Asia*」四九―五―三一号文書のなかに収録されていること、そしてそれ以外の写本の存在については知られない旨を述べた。しかし、前記拙稿の発表後に、同じ写本集の四九―五―一六号文書のなかに、バードレ・ジョゼ・モンターニャ *Jose Montanha* の手になる写本の存在を確認するに至り、ジョアン・アルヴァレス *João Alvarez* の写本と校合する機会を得た。

モンターニャはポルトガル歴史学士院の要請を受けてマカオに至り、一七四二年から「イエズス会極東文書」の騰写に従事したが、一七四五

年に突然にシヤム布教のために派遣されるに及んで、彼に同行していたジョアン・アルヴァレスが騰写事業を継続することになった。したがって、モンターニャとアルヴァレスの二人による別々の写本が存在することとは、彼等が騰写した元の写本が別々であったことを意味する。事実、両者の写本には文言の異なる箇所がいくつかあり、文言の若干異なる原文、たとえば、第一便と第二便の原文があつて、その写本が別々にマカオに残されていたことを示唆している。モンターニャの写本(M写本と略称)では、アルヴァレスの写本(A写本と略称)とは反対の配列で、先ず古賀ジュリオ・ピアニの報告書が三三六丁から三四二丁まで、次にバルディノッチの報告書が三四二丁から三四六丁までに収められている。

古賀ジュリオの報告書は、マカオ・トンキン間の航海日誌及び旅行記の内容を呈しており、彼はほぼ毎日のように、あるいは何か特別な出来事があった時には必ず備忘録として記録を残していたことが、報告書の記載の体裁から見て知られる。このため、彼はマカオ帰着後に日誌や備忘録を整理して報告書を作成したように思われる。同報告書の前半部は、マカオ・トンキン間の航路誌の内容からなり、朱印船携行の航海図とは異なって島名やその由来等が詳しく書かれた文字史料として貴重である。後半部では、トンキンにおける国王との接触や王室行事等が日次記のように記載され、ローマ字綴りの日本語の日付が多く見られる。ま

た日本人の筆者である古賀ジュリオが同胞に対して強い関心を持っていたことは当然のことと思われるが、彼はトンキン在留の日本人やその動静、日本から渡航して来た朱印船とそれに乗船していたキリスト教徒達についてスペースを割いて言及し、特別の配慮を示している。イタリア人バルディオノッチの報告書には日本人に関する記載はまったくなくない。

古賀ジュリオの報告書に対して、バルディオノッチの報告書は、彼の遣使の目的やトンキンにおけるキリスト教布教の可能性、すなわちトンキン人のキリスト教受容の可能性や宗教・習俗面についての言及が中心となっている。また遣使に対する密偵の嫌疑と、これに関わる寺院における起請の強制はトンキンにおける宗教儀式の一端を窺わせると同時に、トンキン・コーチンシナの対立抗争の根の深さをも語っている。さらにトンキンの国情、政治体制、軍隊・軍事力、市街の景観等についても、簡略ではあるが言及されている。

バルディオノッチが、トンキン滞留中に自由に市街を歩き回って自ら情報を入手したと思われる形跡は彼の報告書からは窺うことができず、彼が予め書き認めた質問書(指図書)に基づいて、同地在留の日本人か、ポルトガル人、あるいはトンキン人が情報蒐集に動き回ったようである。このため、彼の報告書はその前半部では、彼が実際に経験した事柄が書き記され、後半部では質問書等によって得られたトンキン情報が要約されて記されている。

両報告書において記載内容が一致し重複するところは数カ所(荒波鎮静化のためにザビエルの聖遺物を海中に投棄したこと・象の祭り・前国王の法要)しかない。二つの報告書が対になって双方の内容を相補う形で、一六二六年のトンキン遣使の全貌と実態とが語られるようになってくる。バルディオノッチと古賀ジュリオは、各々報告書を執筆する段階で、双方の記載内容を予め確認し、執筆の基準や役割分担について話し

合い、内容が重複するのを極力避けようとしたように思われる。

〔註〕

(1) Juliano Balduino イタリアのフィレンツェに近づくストリア Pistoia 出身。シュッテ師によると、一六〇九年ローマでイエズス会に入り、一六二二年インドで誓願ののちマカオに渡航した。当時の日本管区代表ガブリエル・デ・マトス作成の一六一九年の報告によると、彼はこの時五二歳、入会歴一五年であるが、一方、一六二三年作成の第一名簿には、当年三五歳、入会歴一五年、とある。シュッテ師に従えば、一六二三年作成の名簿記載が妥当のようである。一六二六年には、彼は三八歳であったことになる。一六三一年八月マカオで死去した (Josef Schütte, Monumenta Historica Japoniae I, p. 805, 958, 1136)。

(2) 古賀 Julio Piani 一六二〇年作成の第一名簿によると、肥前国有馬領古賀の出身、当年五二歳、入会歴三三年という。初めの頃は高来のマリーノ Marino do Taegu と称し、一六〇三年作成の名簿には「古賀ジュリオ」と記載されている。有馬氏配下の古賀氏の子息で、一五八六年九月にイエズス会に入った。ラテン語を六年学び、説教師として活動する一方で、一六〇七年には西ロマンと共に日本人修道士のために説教書の日本語の翻訳に当たっていた。一六一三年にはイタリア人バードレ・カミロ・コンスタンチオと共に堺のレジデンシアで布教に従事していたが、一六一四年マカオへ追放された。一六二七年二月三十一日死去した。五八歳であった (Schütte, p. 272, 320, 444, 506, 557, 865, 994, 1206)。

一・一六二六年、古賀ジュリオ・ピアニのマカオからトンキンまでの旅行及びその帰還に関する短い報告

〔一〕一六二六年二月二日、すなわち、聖母マリアの清めの「祝」日にして、日本の新しい月の六日の月曜日(正午に、バードレ・ジュリオ・Balduino) ネットと私は、マカオのコレジオを出発して少し先の湾口の岬

まで達しました。

私達は三日の朝に出帆してアンドレ・フェイオの入江に到着し、そこに投錨しました。そして、その後にはイリヤ・ド・トリゴ(Ilya de Trigo)(小麦島―訳者註)の正面にまで航行しました。

四日の水曜日(Andre feio)の朝に、私達はこの島から外洋に向けて出発しました。五日の朝に、私達は右手(ete Irinao)に七人兄弟と称する島嶼を見て前進しました。

土曜日の夜には、私達は日本人達がシナ・ムト(Sina mutō)と言っている岬を通過し、そのところで北風を受けてトンキンに向けて方向を変えました。

私達の出発から七日経った日曜日の正午に、私達はトンキンに向けてコーチンシナの沿岸を通過しました。こうして、私達は蜥蜴と称している島を尻目にして進みました。この名前は、この島が蜥蜴に似ているところから日本人達が名付けたものです。しかし、日本人達がトンキンから帰航する時には、この島ではほとんどいつも逆風が吹いて、同所に六、七日間ほど留まるために、彼等は蜥蜴の名を替えて、ナスカシマ(Naukasima)と名付けました。すなわち、これが七日島です。

日曜日の真夜中に逆風になったため、私達はすべての帆を下しました。そしてそこには甚だ強い潮流がありましたので、錨索二本を投じて船を繫留しました。しかし、私達の主が順風を与えて下さったため、私達はそこを出発しました。月曜日の朝に私達はギアン(Gian)(儀安)の港の近くにいましたが、そこにはトンキンへ渡航するため日本から来たジャンク船数隻が入港していました。しかし、誰もこの港の入口を知らず、そこが本来のギアンであるかどうかも知らなかったため、その洋上にいた漁船数隻が私達に港口への道を教えるため、私達の船で来た一人の通詞を呼びました。しかし、その沿岸にオランダ人達が徘徊してバルク船(解)数艘と人々を掠奪していたため、漁師達は私達も同類であると考えて、どのようにしても私達に近づこうとせず、むしろ私達が海賊であ

り盗賊であると言いたてて、私達から逃げ去りました。この理由のため、アンドレ・エスピネルはナヴィオ船が引いていたバラン船(Balán)に乗り込み、彼がトンキンの国王から入手していた允許状を振りかざして、漁師達に私達が良い人間であること、また私達がトンキンの国王の允許状を有し、彼等が考えているような盗賊ではないことを知らせ理解させようとなりました。そして、彼等に允許状を見せながら近づいて行き、彼等が私達を抱いていた恐怖を取り除き始めました。彼等は漁師三人を取り押えました。そして、私達が行こうとしていたシノファイ(Xinofai)(清華)と称した別の港を彼等が私達に教えてくれるように、船内で彼等を好遇して銀や食物を彼等に与えました。私達はこの場所を出発して、ヨーロッパの一二レグア(レグア)、日本の二五「レグア(里)」の距離にあるシノファイへ向かい、火曜日一杯航行しました。しかし、ナヴィオ船は陸地からかなり離れて航海していたため、漁師達自身がシノファイの港の入口を確認することができず、その夜、私達は再び碇泊しました。

私達のマカオ出発からすでに一〇日経った水曜日(Andre Espinel)の朝に、私達は帆走してシノファイの港に到着しました。しかしその時、上記の港を十分に確認しなかったため、私達は再びその夜も碇泊しました。

木曜日(Andre Espinel)の早朝、アンドレ・エスピネルは、その土地の人々からその港「の名」を知るために、そして同時にその地の執政官(Governador)に対してシノファイに私達を導いてくれる者誰かを、あるいは数名の水先案内人(Guia)を要請するために陸に行きました。この土地でもまた、人々は私達の者が近づくことを望みませんでした。彼が国王の允許状を彼等に示し、また私達が盗賊でないことがわかりましたので、その執政官はシノファイに私達を先導していく水先案内人二名をすぐに私達に与えました。しかし、木、金、土曜日の三日間は、風が強くなり波が荒れたために、エスピネルが乗って陸に行ったバラン船は陸を離れることができず、陸から遠く

に碇泊していたナヴィオ船を捉えることができませんでした。

日曜日の正午、風が少し弱まった時にバラン船が陸地を離れ、ラスカル達<sup>(7)</sup>だけに乗せてナヴィオ船に着きました。またエスピネルは陸地を離れてバルク船で来ました。ところが、強風のためバルク船がナヴィオ船を捉えることができなかつたので(F.19v)、バラン船がナヴィオ船から離れて「バルク船まで」来ました。このようにして、エスピネルはバラン船でナヴィオ船まで来ました。彼は船長及び全員に執政官との間に行なわれた順調な交渉経過について報告するや、ナヴィオ船から遠くに止まって待機していたバルク船に乗り込むため、そして陸路シノファイに向かい、また私達が赴こうとしていたシノファイの港を私達に指し示してくれる小船<sup>(Mandarin)</sup>に関して、その土地のマンダリンと交渉するために直ちにバラン船に乗船しました。

ナヴィオ船の「乗船」者達は、水曜日の「夜」から月曜日の「朝」一〇時頃までの五日間、陸地から遠く離れたニレグアの海上に碇泊していました。私達は日夜たいへんに難儀して疲労困憊し、どのようにしても睡眠をとることができませんでしたが、それは、波がナヴィオ船にぶつかるためであり、またナヴィオ船が少しの間も休むことなく絶えず一方の舷側から他方の舷側に揺れ動いたからです。

私達が海上にいた時、すでに述べましたように、五、六日の間に帆柱は恐るべき風のためにとくに奪われてしまいました。

月曜日の正午、風に少し恵まれましたので、私達は斜めに帆を張ってシノファイへ進航しました。しかし、風がほんの少ししかなかったため、私達は孕綱を使ってバラン船にナヴィオ船を曳航させました。これは、一方では全員がすでに同じ所に何日も碇泊して疲労していたためであり、また一方では水曜日に当たる明後日の、その月(陰曆一月)の二二日を怖れていたからです。しかし、言及しましたように、風が弱かつ

たため、私達はほとんど同じ地点に再び碇泊しました。その後、同じ月曜日の午後少し好都合な風になりましたので、私達は再び帆柱を備えて付けて日本のニレグア近くを進みました。しかし、すでに夜になっていて風も甚だ弱かつたため、私達はまたまた碇泊しました。したがって、私達は火曜日の午後まで止まっていました。けれども、同じ日の午後私達は前日同様に同じ程度に少しばかり前進して、すぐに碇泊し、水曜日の午後まで「そこに」いました。

その午後北東風ないし「ノルテ・」クアルタ・レステ<sup>(8)</sup>(北)北東)の風が吹きまされたので、私達は進航し始めましたが、すぐに碇泊してしまいました。日夜何日も烈風が吹いたため、パードレが所持していた聖フランシスコ・ザビエルの「聖」遺物を「海中に」沈めることを避けることができませんでした。風は鎮まりました。

この間に、エスピネルと一緒に行ったその土地の者数人が来て、翌日の木曜日(F.20)シノファイの港に私達が進入することができるとの報らせを私達にもたらしめました。木曜日の午後、執政官から遣わされたバルク船三、四隻が来て、私達のナヴィオ船をその港の入口まで曳航しました。このようにして、私達は一五日間で陸に上がりました。木曜日もすでにかなり遅くなってからのことでした。神に感謝。

アンドレ・エスピネルは、二月一八日ないし一九日に国王の王都に向けて出発しました。私達が滞留していた当港の役人は、シヨカンゲとトシキンとの間にあった戦争が原因してこれらの河川を徘徊している盗賊や海賊のために、櫓付きの大型ガレー船四隻で彼を導きました。私達は同じシノファイの港で、ある時はナヴィオ船の中におり、またある時は陸におりました。海賊は陸上にもいました。小犬のような小さな豚が二匹、また二匹、野菜の小さな包み一箇が五、六ないし一〇カイシャします。日本の大きなコン・コネンボ<sup>(9)</sup>であるオレンジ一

個に、私達は一コンドリンに相当する六カイシャを支払いました。購入した牡牛一頭に七・五バルダオを与えました。つまるところ、すべての物が高価であり、しかも潤沢でないため、買入れることができません。

この土地の人々は全員が漁師であり、このため、彼等は礼儀に欠けて恥ずかしさというものを全くもちあわせていません。彼等の菜園はほとんどすべてがタバコで溢れ、萵苣や「玉葱が若干あります。しかし、川の一方の側には五斂子、レモン、辛菜、胡葵」及び桃の樹等がありません。しかし、これらはほんの僅かにすぎず、菜園はすべてタバコからなっていると考えられています。

二月二日に当たる五旬節前の日曜日に、ナヴィオ船でミサが立てられ、水曜日に船内の全員が灰を取りました(灰の水曜日―訳者註)。

二月二日には一、二名の宦官が、見事に繭装された各々が四六本、五〇本さらにそれ以上の櫓をもつガレーラ船四隻に搭乗してやって来ました。

翌日の日曜日、私達はナヴィオ船の船長とポルトガル人数名と共にその宦官を訪ねて行きました。彼はオレンジ、無花果そしてビスケットやブドウ酒を私達に振舞いました(1720)。昨日三月二日の水曜日、エスピネルが彼と一緒に王都から来た土人達と共に、別のガレーラ船四隻に乗って一日間で戻って来ました。彼は、私達が王都まで赴き国王に会うための免許状をもたらしました。と言いますのは、ナヴィオ船はこの地方では新奇であり、しかも白い布からなる八枚の帆を持っている等と、エスピネルが彼(国王)に申し上げたからです。トンキンに居住していた五、六人の日本人もまた一緒に来ました。彼等の一人は長崎出身でジョアンと称し、これまでこれらの地方に赴いて同地方を歩き回り、またポルトガル語をよく話す男であり、「シノファイに」到着した同じ日に早速に当地の立派なオレンジ一籠を私達に送ってよこしました。

火曜日の朝、宦官がナヴィオ船を見にやって来ました。その時、上述の日本人達もまた私達を訪ねるためにやって来ました。宦官は酒壺一〇箇を持参し、そのうちの二箇をバードレに与えました。私達はエスピネルの到着後もなお四、五日間(同地に)滞留していましたが、それは、宦官がことを早急に処理してくれるようエスピネルが大いに働きかけたにもかかわらず、彼がナヴィオ船の王都への出発に許可を与えなかったからです。

ついにすでに水曜日(13)の夜になって決定が下されました。このようにして、私達は三月六日の金曜日に一〇隻の小船、すなわち、私達の商貨を運んでいったシェンジャ船三隻、国王が遣わしたガレーラ船五隻、そして他の人々や上述した日本人達が乗船した別の「バルク船」二隻とからなる船隊をもってシノファイの港を出発しました。これらの五隻のガレーラ船と二隻のバルク船は、私達の商貨を積んだ「シェンジャ」船を監視するため三日三晩いつも私達の船と一緒に航行しました。商貨を積載した私達の三隻のうちのある一隻が干潟に乗り上げた時、ガレーラ船の人々は皆、川に入って坐礁していた船を懸命に押し上げて深みに導きました。私達は川を上るのに(夜は除いて)二日間を費しました。すなわち、三月六日と七日の金曜日と土曜日とです。

三月八日に私達はミアコに到着しました。しかし、すでに夜であったため、私達は上陸しませんでした。国王が私達に宿泊する家を与えなかったため、私達は月曜日の午後まで商貨を積載した三隻のバルク船におりました。しかし、郷里の出身者とトンキンで結婚して、国王のたいへんなお気に入り、しかも日本人達の通訳であるウ(ル)ストラという名の一日本人婦人が、同じ日の朝すぐに港口にバードレを訪ねて来て、私達にまだ宿泊すべき家がないのを見て私達にいたく同情しました(1421)。彼女は直ちに国王に会いに行き、私達が今なおバルク船にいると

いうことについて「国王と」話すまで「王宮に」通って行き、彼と話し合いました。同じ日の午後、彼女は私達が今なお残っていた私達のバルク船に再びやって来て、彼女が国王と話したこと、そして私達がすでに家を有していること、また私達がすぐに下船して、三隻のシンジャ船にまだあった物はすべて私達が持っていくように、と言いました。このために、彼女は私達の商貨を運搬する人間を連れて来ました。このようにして、この婦人の尽力と努力の結果、私達はバルク船を離れて、年老いた善良な男である一人のマンダリンの一軒家に宿泊しました。

小船三隻の商貨は、香木、丁子、道具箱は言うに及ばず、兵士達の他の箱や私達の机までも、すべて国王の邸宅へ運んでしまいました。彼は代理人の面前でそれを開けさせ、開けられないようにしていた一個の机も残さず、すべての箱を開けさせました。それで、ミサの道具が入った箱までもすべての者に見せてしまいました。値の張る物やがらくたも、彼を満足させる物は何んでも自分のために取りました。留意、飾銀、巻物、色付きの絹糸、眼鏡、紙その他、それらは私達が事務室で消費するものです。

三月九日の月曜日、国王はたいそう広々とした平地のある場所(tent of exchange)で象の祭りを行ないました。彼はポルトガル人達に来るように命じて、彼等を晩餐に招きました。祭は盛大に祝われましたが、それは、敵との戦闘の方法を象に教えこむものでした。国王自身がそれらのなかの巨大な一頭に乗って、いろいろな事柄をこれに演じさせました。そして、彼は執政官(G. O. Pradon)に三万一、二〇〇「タエス」に相当するおよそ六万カイシャを与えました。それらは祭のあとでかなり遅くなってから彼等の間で分配されましたが、彼等各人にはおよそ三タエス弱の割前が配分されました。もう一度、たくさんのオレンジ、無花果、胡瓜及びコウアイ(C. O. V. A. I.)が五、六個の盆にのせて「出されました」。私達はこの王都にいる今日(九日)と八

日の二日間にはまだ彼を訪問していませんでしたが、それは、いずれの日も新たな障害が起こったためです。

三月一九日ないし二〇日に、ミゲルという名のキリスト教徒がこのトンキンからジアン(Chan)(儀安)に赴いた時、私達は巡察師ジエロニモ・ロドリゲス(J. R. Rodrigues)への書翰数通を彼に託しました(F. 21v)。私達が三月八日の日曜日にこの王都に到着してはぼ二三ないし二四日が経ってから、私達は四月七日の火曜日に国王を訪ねて行きました。そして、私達はマカオから持参した書翰数通を彼に捧呈しました。国王はことのほか喜んで、五万カイシャ「の銭」と、彼がいつも飲んでる酒二壺を私達に与えました。そのうちの二万五、〇〇〇カイシャは私達に、他の二万五、〇〇〇はエスピネルと、私達に同行した人々に与えました。

四月五日の枝の主日に当たる日曜日に、二人の日本人が十分に教理を授けられたのちキリスト教徒になりました。彼等の名はイグナシオとフランシスコであり、アンドレ・エスピネルが代父、ウルスラが代母を勤めました。そして、のちに……<sup>(20)</sup>

復活祭の前日、ナヴィオ船が川を溯って王都に到着しました。直ちに八日祭の最初の日に、首席の船長は彼と一緒にナヴィオ船で来た他のポルトガル人達と共に国王を訪ねて行きました。私達も、またすでに彼を訪問していた他の者達も訪ねて行きました。船長が彼に贈った物は、ポルトガル産の薄い布でできた褐色の帽子一個、甚だよく調整された燧石一箇、レース飾りのあるハンカチ付きの円い盆一個と板状の砂糖菓子でした。国王は訪ねて来ていた私達全員を招いて、八、九箇の盆に盛られた土地の食物や酒を振舞いました。そして、彼は私達に一〇万シェラフインの貨幣と彼が飲んでる酒を三壺与えました。それらの現金は、一部は私達に、他は船長と代理人に、そして第三の部分は私達に随行して来た者達に分配されました。酒壺三箇のうちの一つはその場で開けて飲

みました。

四月二三日、私達は二隻のジャンク船が日本からジアンに到着した、との報らせを得ました。同じ日に、私達は船長と一緒に皇子を訪問して行きました。彼は私達を招待してその土地の食物をもつててなし、五万カイシャの贈物を私達全員に与えました。

同地に居住している日本人のキリスト教徒六名が告解をしました。彼等は(4・32)、告解を聴く司祭が同地にいなかったため一〇年以上の間、告解をしていませんでした。そして、大人二人と同じ日本人の息子である子供三人が新たに洗礼を受けました。

聖霊降臨祭に当たる五月三十一日に、商貨を積んで来たおよそ三〇隻のバルク船と一緒に日本から来た日本人達が着きました。三隻のソマ船で漳州から来たシナ人も到着しました。背教していた日本人達のなかの七、八人の者が大きな痛みを感じて、また自分達の罪を痛悔して告解を受けました。

(異教徒の「風習カ」に従ってその月の五日に当たる)ゴウグアルの月(五月)の三日に、パードレの気分がすぐれなかったため、私と船長がポルトガル人数名と共に、ゴグアツ・ゴニチ(五月五日)の節句の祝詞を国王に述べるため「彼を」訪ねて行きました。彼は私に一万カイシャを、船長にも同額を、そして全員には良質で肥えた生きている牡牛一頭を与えました。私と船長には私達各々への盆を与えましたが、このことは、国王が執政官やこの階級の人物以外の家臣には決して行なわない特別の恩恵でした。そして、「私達に随行した」およそ一二人の者には盆を二人宛に「一つ」与えました。彼はさらに米一〇籠、莢豌豆二籠、及び多くのパタカ「銀貨」を私達に与えました。また彼は自分が飲んでいる酒を私達に振舞いました。

七月一日ないし二日に、私達はトンキンに来たシナ人達もたらした

と言われる、南京でパードレ達やキリスト教徒達に対して起こった迫害についての報知を得ましたが、その迫害の理由は、多数の者——伝えられるところによると二万五、〇〇〇人——がキリスト教徒になったためであり、そして彼等すべての者が熱心に教会に参集したため、と言われています。したがって、多数の者が殺害され、パードレ達は南京から放逐されたとのことです。

同じ「七月の」六日ないし七日に、私達はコーチンシナから数通の返書を得ました。

国王の父の命日であるゴウグアツの月の二〇日に当たる「七月」二五日に、彼は祭りを挙行して満艦飾のガレーラ船すべてを川に浮かべ(4・33)、各ガレーラ船が三門搭載しているすべての「大」砲と小砲、すなわち、船首にある三ないし四ポンド砲一門と船尾にある小砲二門、すなわち、右舷の一門と左舷の一門を発射させて一日中祝いました。この祭りの前に、「彼は四、五日ガレーラ船を漕がせました。この祭りの第一日目に」彼は各々が五〇挺ないしそれ以上の櫓を持つ、実に見事で華麗なガレーラ船を私達に見せようとして、彼がいた舷門に私達全員を呼びよせました。彼が乗船するガレーラ船には五四挺の櫓がありました。

七月二日に一ジャンク船の日本人達が日本に帰るための事務処理を急ぎ、本年越冬する他の一ジャンク船を残してトンキンを出発しました。

聖霊降臨祭後の七日以来ブドウ酒がなかったため、ミサはありませんでした。

ロクゲアツ(六月)の月の九日、私達のパードレ聖イグナシオの日である七月末日に、国王は私達にマカオに帰るための許可状を与えました。

ロクゲアツ一七日に当たる八月一五日の火曜日の正午に、私達がトン

キンの川を出発しようとする時、国王は河口までナヴィオ船を案内するためにガレーラ船二隻を遣わしました。

私達は川を出るまでにほぼ五日間を費しました。土曜日の「午前」一〇時に、私達は川―「捕漁の仕掛けがたくさんある最後の場所」―を離れました。日曜日の八月二三日に、私達は海洋に出ました。

私達がトンキンの川から海洋に出たのち一日間というもの、一陣の風もなくしばしば無風の状態に陥ったため、ある水曜日の午後、バードレは自分の聖物匣を、私達の聖なるバードレ・フランシスコ・ザビエルの聖遺物を所持していた水先案内人に渡しましたが(F. 23)、それは、好天気を私達に与えてくれるよう「全員」眼前で彼に懇願するために、程なくして翌日の木曜日の朝、私達はすべての者がその聖人が死したサンシエアン(上川)の島であると言っている陸地を認めました。そして、好都合な風が吹きました。私達はこの陸地を見て慰められました。私達は、私達が外洋に出るから何日も経っていたからです。私達は二昼夜、主としてアイナン(海南)の湾では無風状態にありましたが、多くの場所ではしばしばはや航行できるような天候ではなく、また航海するための風もありませんでした。

しかし、この島はサンシアン島ではありませんでした。なぜなら、四、五日ほど過ぎてからこの島のつぎにサンシアンに到着したからです。それは、サンシエアンからはるか遠く隔った洋上にある大きな一島でした。とは言え、聖人は私達の哀しみと苦難、そして何らかの救いを彼に求めているのを見て、主なるデウスから「私達が」この島を見ることと、風を私達のために得て下さいました。これによって、彼は私達をいく分か慰めて下さいました。それ以降は、私達はつねに陸地を見ながら「航海を」続けました。

現実に、私達が烈風にも逆風にも見舞われなかったのは、デウスの御

慈悲のお蔭でした。私達は(船尾に風を受けませんでした)、むしろ横風を受けて少しずつ進みました。このため、シチグアツ(七月)の月の一六日の今日の日曜日、デウスの恵みによって私達はすでに七レグア離れたプロ・タシヨの島嶼のなかにいました。

こうして、今日、私達は二〇日間を費して辛じてプロ・タシヨの島嶼に到着しました。これは、真実、プロ・タシヨの島嶼であると思われる。なぜなら、シナのこの土地がそれ自身無数の同じような島嶼からなっているために見分けることも識別することもできないからであり、また、これまで人々がいくつかの島々に付けた名が少しも的を得ていないために、島々が持つ固有の名を付けることをしなかったからである、と私には思われます。いく人かの者が確信して、この島はこうで、あの島はあめで、と述べていながらも、それらが適切でなく誤っていたため、彼等は固く口を閉じて敢えてそれ以上のことを語ろうとはしませんでした。そして、これらの島嶼等を認識するのは不可能である、と述べています。

ついに、私達はサンシエアンと呼ばれる島嶼に到着しましたが、これらの島々は私達の聖なるバードレ・ザビエルが死去した所ではなく、通常、サンシエアンと呼んでいる島嶼からかなり遠く下方にありました。私達がいたこれらの島嶼には、東風、北風及び南風に適した良港があり、私達はそこに六日間碇泊しました。そして、この期間に非常に烈しい東風が吹きましたが、これは、デウスの特別のはからいでした。と言いますのは、もしも私達がアイナン湾か外洋の他の海域で六、七日も続いたこの風に遭遇していたならば、私達が粉微塵になっっているか、あるいはトンキンの土地か別の地方に漂着しているか、あるいは海の底に沈んでいるかは、デウスがまちがいなくご存じであったからです。しかし(F. 23v)、その港はすぐれていて農民達や漁師達の小屋が数軒あり、



数カ所に良質の水がありましたので、私達はいく度か上陸して泉に〔水くみに〕行き、またそのような長旅の疲れをいくらか和らげました。

ついに九月二日、デウスのお蔭で東風が止んで北風<sup>(29)</sup>になり、これで私達は数レグア進航しました。しかし、程なくして停船しました。そこから先は、一寸した風がありましたので、停船しては進航するという状態でした。このため、今日九月一日には私達はすでにマカオから五、六日の近くにいました。しかし、風が逆であるために私達は碇泊しました。

ついに九月一七日の今日、(全能なるデウスのお蔭で)私達は到着してマカオの港に入りました。そして、私達はインドから来た新任の巡察師<sup>(Andre Palmeiro)</sup>アンドロレ・パルメイロと巡察師が連れて来た他の同行者六、七名、そして同じく私達の尊敬すべき修院長<sup>(Manoel Lopez)</sup>マノエル・ロペスと抱擁の挨拶を交しました。私達は全員、私達の主がこのナヴィオ船をその乗船者全員と共に恩恵をもって導いて下さったため、最高の喜びを示して祝福しました。しかし、トンキンでは三人の者が死去しました。すなわち、ポルトガル人のコンデスタベル<sup>(Condestavel Francisco)</sup>フランシスコ、カステリヤ人のトマス・デ・ビリェガス、及び日本人シヨルジロー(庄次郎カ)・ジョアンです。

この報告の初めに述べましたように、私達は「一」六二六年二月二日に出発して、七ヵ月と一七日間トンキンにおりました。あるいはもっとはつきり言えば、国王が私達を抑留しました。(留意。二月二日から九月一七日まで。)そして、私達がトンキンにおいて何ヵ月も経たのちの、私達の聖なるバードレ・イグナシオの日である七月三一日に、国王はようやく私達にマカオに戻るための許可を与えました。したがって、すべての者はその許可を入手した時たいそう喜びましたが、多くの理由と障害のため望みどおりに早急にその土地を出発することはできませんでした。

ついに八月一五日の火曜日、その日に急に私達はその土地から下流へ出発しました。すでに南の季節風が吹く時期から外れていましたが、私達の主たるデウスはその限らない慈悲をもって私達をこのマカオに導かれました。それも、ナヴィオ船の人たちは皆、トンキンにいる間(4.24)、疲労と苦痛と不快感に絶えず悩まされていきましたので、私達の主なるデウスはこの人たちに憐みを抱かれたものと思われまます。

このように、私が述べるように時期外れでありましたが、私達は多くの苦しみを与えるような逆風に遭遇することは決してありませんでした、またほんの少しの好都合な風もまたありませんでした。しかし、私達は航海を進めて三〇日間で(留意。八月一八日から九月一七日まで。)このマカオの土地に、そしてこの聖なるコレジオのある土地にかろうじて上陸しました。すべての者の喜びはこの上ないほど異常なものでしたが、それは、陸路で伝わっていた、私達がトンキンで殺害されたという噂をすべての者が心配していたためである、と私は思います。

〔註〕

- (1) M写本では、「7 picos 七つの尖り山」となる。「七嶼」、「七嶋」、「七岬」、「七州洋」がこれに当たる(中村 拓『御朱印船航海図』二〇九—二一〇、二三六頁)。
- (2) M写本はChina natoとする。「チナンタ(ト)ウ」、「チナンチウ」、「ちんなむたう」を指す(中村、五三九—六五頁)。
- (3) M写本はNunusimaとする。
- (4) 權付小型輕船。その船底には一片の木が用いられ、インドやマレーシアで使用された(Dicionário da Linguagem de Marinha antiga e actual, Lisboa, 1963, p. 58)。
- (5) 一六三七年一月に平戸からトンキンへ渡航したオランダ船フォルル号の「航海記」に見える「セネファイ Senephai」すなわち清華(清化) Thanh Hoa (Thinh Hoa) である。

- (6) 一レグア legua は往時の約5kmに当たる。  
(7) インド人ないしアフリカ人水夫。  
(8) 「元和航海記」により、「ノルテ(北)」を補う〔海表叢書〕第三巻、一六頁。  
(9) M写本では、「金曜日」となる。  
(10) 不詳。M写本は、Chocano とする。  
(11) 不詳。  
(12) M写本により補う。  
(13) M写本では「木曜日」とする。  
(14) 正しくは Ursula と綴る。ウルスラについては、拙稿「トンキンの日本人通詞ウルスラについて」(『日本歴史』四八六号、八九―九二頁)、永積洋子「再考 トンキンの日本人通詞ウルスラ」(『日本歴史』五三二号、七九―八二頁) 参照。  
(15) M写本では、「a barca バルク船に」となる。  
(16) M写本では、「Senhores 士人達」となる。  
(17) 不詳。  
(18) ポルトガル出身。一五八五年イエズス会に入り一六〇〇年来日す。一七一七年七月マカオへ渡航。一六二三年から日本・シナの巡察師を勤む。  
(19) M写本では、「四月二五日」とあるも、同月一二日が復活祭のため四月五日が正しい。  
(20) A写本、M写本とも、文章が続くかのようにあるが、すぐに次の節に入っている。  
(21) 船長はジョアン・アルヴァレス・ペレイラ João Alvarez Pereira である (Jap. Sin. 88, f. 1)。M写本は「O Senhor Capitão 船長閣下」となる。  
(22) A写本では「more」と読むことができるが、意味不明。M写本では「home」<sup>とある</sup>。「mode 風習」の誤写か。  
(23) 正しくは七月一日である。M写本では「ゴウグアットの月の二二日に当たる一五日」となる。  
(24) M写本により補う。

- (25) 正しくは「ロクゲアツ二四日に当たる八月一五日の土曜日」となる。  
(26) M写本により補う。A写本は「川にたくさんある漁場」となる。  
(27) M写本により補う。  
(28) M写本では以下のようになる。「私達はすでにサンシユアンの近くにありブル・タシヨの島々のなかにありました。ブル・タシヨはこの島から七レグア離れています」。  
(29) M写本では「北東の風」となる。

## 二．一六二六年、パードレ・ジュリアーノ・バルディノッチの トンキン航海〔報告〕

ポルトガル商人数名が、一隻のガリオタ船(galioata)でトンキンの国に航海することに際し申し出た機会を利用して、その時まで「私達がその地に」行ったことがなかったため、彼等の告解を聴くため、またその地が私達の聖信仰の説教を受け容れるための状態にあるかを調べるため、私を日本人のイルマン「古賀」ジュリオ・ピアニと一緒に派遣することが「適切である」と上長達には思われました。

私達は、この目的をもって一六二六年の聖母の清めの日にマカオ市を出発し、道中に三日を費しましたが、それは、この新しい航海についての確実な情報をもちあわせていなかったためであり、また暴風雨のためでもありました。暴風雨は烈しくはありませんでしたが、私が我等の至福なる聖人ザビエルの聖遺物一箇を海中に投げ入れた時に穏やかになりました。私達は内陸部に一レグア入り込んでいる川を溯って三月七日にトンキンに到着しました。国王は私達の来着を知ると、ガレー(galeras)船四隻を遣わして洋上で私達を迎えさせました。それで、これらのガレー船は「付近を」荒し回っていた海賊達から私達を保護するために、その川全体を通じて私達に随航しました。

私はイルマン・ジュリオと共に、ポルトガル人全員を伴って国王を訪ねて行きました。彼はたいそう機嫌よく喜びを表わして私達を迎え、多くの様々な食物を振舞って私達をもてなし、私達の来着について祝詞を述べました。そして、必需品を与えて私達に好意を示しました。暇乞いの時には、彼は船長と私にその土地のいろいろな反物を与え、私達のために立派な家を新たに造らせました。そしてそれは、その土地にあつたなかでも最高の物でした。私達が同地に滞在している間、彼は私達に数々の好意を施し、船長にも私にも様々な食物の贈物をしばしば送ってよこしました。そして、私が船長や他のポルトガル人達を同伴してその宮殿に彼を訪ねて行った時には、彼はいつでも贈物をし、他にもいろいろな品々の贈物をほとんどいつも追加しました。

彼は彼等の祭り、すなわち、象の戦闘、馬の競争、ガレー船の勝負に私達をしばしば招待しました。そして、彼自身が一頭の巨象に乗って逃げ回る兵士達を逃走しました。「象は」彼等の手から槍やハタモノや薙刀を奪って国王に与えました。馬も同様のことをして口を使って地面から槍や鞭を取りました。そして、彼は騎乗していた騎士達にその馬を与えました。彼はまた喜劇、歌及び婦人達による舞踊に私達を招きましたが、私はそれらを見たくなかったので、彼は気持よく私に免除を与えました。国王がこうした好意を施したのは、世評では、彼がポルトガル人達と取引をしたいという強い願望を抱いていたためと思われています。すなわち、その土地では彼等のナヴィオ船がもたらす利益が莫大であるからです。

私達がそこに滞留していた時期に、私はできる限りポルトガル人達がその土地で良い模範を示してくれるよう努めましたので、彼等は実際に模範を示しました。このため、国王は私達の聖なる教えについてのよい評判を得て感化を受けました。そして、彼は私とその国に止まるように

強く希望して、このことを王宮の家臣である宦官を通じて求め、天の事柄を教えさせようとなりました。私は彼が数学を理解していた、と思いません。彼は国王が私の学識について知らされていた、と言いました。彼は国王の師匠で、王宮の主要な家臣で、宦官であり、また宗教家です。彼が私を一度訪ねて来た時、彼は自分の教えについて私に話し、私は私達の教えや自然の様々な事象について三時間にわたって語りました。

彼はこのような方法によって「私達の教えについて」納得しました。そして、彼はしばしば自分の家来達やポルトガル人達の面前で、トンキン人は動物がどのように生きているか考えないし理解もしていない、と言いました。そして、彼はそのことを教えるためにその土地に止まってくれるよう、私に切願しました。その後も、彼は度々私に贈物をし、また別の機会に私を訪れた時には、礼を尽し親愛の情を示しました。

私は国王から遣わされたその家臣に対し、自分が「マカオ・トンキン」往復の救霊の師としてポルトガル人達に同行するよう私に命じた上長の許可がないために残ることができないと返答し、(私達の聖なる教えを受け容れるための状況にあるか、この地を調べるために派遣されたということは言いませんでした)。そしてマカオにおいて、「[同地に]」戻り滞留して奉仕するための許可を請願する、と言いました(17)。また、私とその許可を入手したならば、金や銀のためではなく、天の事柄のみを教えるため、そして天地を創った真のデウスを認識させるため、この偉大なる東方の地に来るために、大いに喜ばれるにちがいない、と考えているということを言いました。彼(国王)はこの返事にたいそう満足しました。それから数日して、彼は主要な偶像寺院のかの坊主を遣わして私を訪問させたのち、(私は私達の聖なる教えの事柄について時々話しましたので、それについて彼(坊主)は床に頭をつけて私達の救い主の肖像を拝みました。そして、立派な贈物を差し出しました。)王宮に

私を呼んで、盛大な祝宴をもうけて私をもてなしました。そして、彼自ら球体に関する数学の問題について私に質しました。私は次の年に「同地に」戻って来ることに、また「約束に」背かないことを肝に銘じました。彼は私とその土地に戻り、同地に安全に居住することができる、しかも私を少しも辱しめるような危険のない、允許状を私に送って来ました。

同じように、この国の嗣子である皇子が私に別の允許状を与え、また私に贈物をしました。そして、彼の母である王妃は、彼女を不安に駆り立てていた悪魔の幻影を夢に見ていたため、もしも彼女がキリスト教徒になったならば、悪魔がこれ以上彼女を苦しめることをしないと私が保証することができると私に尋ね「させました」<sup>(3)</sup>。私は、彼女がキリスト教徒になれば、悪魔がキリスト教徒達を怖れていて善良なキリスト教徒達からいつも逃げているので、悪魔は彼女を残して彼女から逃げていくことを、私達の主であるデウスにおいて信じていると、そして、私が彼女のため真実のデウスに懇願すると答えました。私達のガレオタ船の船長が私に述べていたように、彼女はコンタス（ロザリオ）を頸にかけると、すべてから自由になりました。

しかし、このトンキンの国外に放逐されるのを怖れた悪魔は、たいそう善良な皇子が「キリスト教の」布教を始めさせようとしているのを見て、ある一人の黒人を通じてこれを邪魔しようとしてきました。この者は、噂によると、ポルトガル人達に対する様々な偽りをならべ立てました。とりわけ、彼等が当国を偵察するためにコーチンシナの国王から送られたということ、そしてこの目的のために彼が多額の現金を船長に与えた、というものでした。そこで、この者は自分が好意を抱いていなかったポルトガル人数名に恨みを晴そうとし、あるいは同じポルトガル人達のいくらかの商貨をもって「同地に」止まろうとして、彼等が有害な人

物として、また密偵として国外に追放されるよう画策しました。

国王は、私達が自らの弁護のため彼に書き送ったいくつかの覚書や、他の土地でポルトガル人達を知っていた彼の一人の義兄弟が私達について彼に与えた善意の情報から、その黒人をあまり信用していませんでした。しかし、彼はすべてについて不安に駆られて、私達がコーチンシナに行かず、彼の敵であるこの「コーチンシナ」国王に援助を与えないこと、そしてつねに彼に忠実で善良な友人であることについて誓約するよう望みました。このため、彼は私達全員を彼の偶像寺院に呼んで、そのような誓約をさせようとしてきました。

私達は「その偶像寺院に」赴きました。寺院の中央では、私達の背後で多くの人たちがすぐに一つの机の上に小さな器を置き、これを酒と水で満たしました。そして、彼等は直ちにそれを鉄の円弾で、次いで刀の尖先でかきまぜました。それから、人々があがなうべきことに対し誓約の形にして書いた一枚の紙（起請文―訳者註）に火をつけました。それから、彼等は自分達が切った鶏の頸の血を数滴その器に滴らせました。彼等全員が机の周囲に起立してその偶像（偶像―訳者註）に無造作にそれをすべてかけました。

彼等は、私達がその時に偶像、祭壇及びその上にある金箔の「<sup>(Cathars & Tournaes)</sup>」に向かつて誓約するように、誓約の形を実行すること、そして各人がその酒を飲むように要求しました。私はその時に、ことが行なわれる前に先んじて、自分が秘かに持って来た救い主の大きな肖像の被いを取り除かれました<sup>(Secundus)</sup>。そして、私はその前にひざまづいてから、私達のデウス（神）以外の別の神に誓約しようとは思わない、と言いました。その肖像は私が以前に所持していたものでした。と言うのは、その肖像だけが神性と、誓約を実行しない者を罰する力を持つていたからです。

そのような誓約に決して来ようとしなかった国王の代わりに臨席して

いた、王宮の重臣である宦官の一人は、その偶像に誓うよう命じました。私は理由を述べてことを取捨しようとし、各人がそれぞれ崇拜するデウスに誓うのがすべての国々の習慣であり、そしてしかも、ポルトガル人達が他の神々になされた誓約を考慮していなかったために、私は国王のためポルトガル人達を救い主のその肖像によく誓わせるために来たこと、そして彼等がそのようなもの(他の神々―訳者註)を認めていなかったし、またそれらに怖れを抱くこともなかった、と言いました。

しかし、彼がこのことを理解しなかったので、私は国王に(彼が直ちに近従の一人を遣わしたように)「彼(国王)に使者を遣わして」私達の決意を伝えるよう、彼に言いました。すなわちそれは(一)、私達は国王が命じたことを実行することを望まないだけでなく、神性のないところではこれを表明しないため、そのような誓約をするよりはむしろ全員が死ぬ覚悟でいるということです。国王は賢明であったので「非を」悟り、私達が望むようにキリスト教徒達の方法に従って私達が誓約するよう、言わせました。

そのため、私はその偶像に背を向けて私達の「救い主の」肖像の被いを取り除かせてからひざまづいて、これに手を置き、トンキンの神にも他のいかなる種類の神にも、それらがすべて偽りであるため誓約しない、誓約するのは天と地とを造った真実のデウスの肖像だけである、と声高に言明しました。そして、私がかもしも誓約の形を実行しない時には、彼(国王)が水、円弾、火、刀及び血の死をもって、またその他のすべての刑罰によって私を罰するように言いました。

私はこのような方法で誓いました。イルマン・ジュリオも同じことを誓い、船長とその他のポルトガル人全員がすぐに続いて誓いました。異教徒達は満足しましたが、彼等は一方では私達のために喜び、他方では彼等の最も聖なる貴いものに私達の誰かを捧げるといふ好機会を失うこ

とを残念がりました。

この結果、国王は疑念を払って直ちに私達に食物を贈ることを命じ、私達が乗船することができたための許可を与えましたが、この時期、彼は疑惑から私達がコーチンシナへ行かないように数ヵ月前から必要以上に私達を拘留していました。この拘留中に、私はトンキンの国に関するいくつかの事情について、詳細に私に知らせることを要求していた指図書によって便宜を得ました。すなわち、これによれば、トンキンのこの国は、国王が住んでいる同じ名前の市から名付けられていますが、北に位置し、北の地方はシナと、南の地方はコーチンシナと、東(西)<sup>6</sup>はラオスと境を接し、東には同じシナの海があります。大きな河川から灌漑した新鮮な土地が四方に一〇〇レグア広がっており、ほとんど全域が平地です。このため、米、肉類、すべての家畜、シナにある各種の多数の果物の如き食糧がたくさんあります。しかし、この地には非常にたくさんの人々がいるために、「その肥沃さに一致しているほどには」<sup>(7)</sup>食料はたいして安くありません。

この土地の人々は偶像崇拜です。ある者達はカルデア人の悪魔達の矢印の物を所持し、他の者達は同じカルデア人の占星術師の矢印を持ち、<sup>(8)</sup>インド人の神秘哲学者のそれを持つている者達もいます。そして、多くの者は、テイヌムと呼ばれたある一人の妖術者をあざけています。彼等は何かひどく悪いことを懸念して彼を怖れているために、様々の贈物を彼に差出しています。彼は信心家とは見做されていません。彼等は彼について、すでに斬られた彼の頭部が、田畑のために伐り開かれている森全体にその眼を向けた時、すべての者が殺していた動物達のために彼がすべてを破壊する、と語っています。この頭部は、彼が生まれた、そして同じ妖術者の孫や曾孫達が居住していた、王都から四日行程の市に葬られています。しかし、この偶像の礼拝にはほんの僅かなものしか捧

げられません。(それらの偶像には現世の諸々の事以外のことは祈願しません)。それは、あるいは彼等にはよい理解力があるために彼の公言していることが馬鹿げている、と判断しているためであろうし、あるいは坊主達自身の不足のために、彼等は学問を教えず彼等を磨くこともしていなかったし、また彼等は非常に少数であるし、あるいは彼等は武器はなんでも、特に大砲と鉄砲を与えられていて、彼等がそれらに甚だ巧みである、と理解されているからです。

彼等は月のような「白い」顔色であり、背の高い大きな身体を持ち、力も勇気も劣つてはおらず、髪を長くして漏斗型の帽子をかぶり、膝まで届く切れ目のある上着を重着して歩いていきます。

また兵士達は肩から斜めに掛けた刀を携行し、性格は善良であり、真面目で忠実でおおらかであり、シナや日本の外国人達のような悪習を持っていません。下層の人々は盗みを働く傾向があります。しかし、盗賊達は姦通者同様に死刑をもって厳しく罰せられます。

国王は九カ国を支配しています。三人の国王、ヲオス、コーチンシナ及びバウの国王は彼に年貢を払っています。そして、彼もまたシナの国王に従属していて、その者に彼は三年毎に黄金の像三体と銀の像三体を捧げています。彼は二百万近くの所領を有し、広場に大軍隊を配置することが出来ます。彼の最も地位の重いほぼ六〇〇人の高官達は、戦いのある場合には、ある者は一、〇〇〇、他の者は二、〇〇〇の兵士を彼に与える義務を負っています。彼等は他にも大きな二カ村を領有しています。国王はこれらの村々を、彼が彼等に要求した時に彼等が出す兵士の負担に依じて彼等に付与しています。

彼は多くの港に、二六挺の櫓を舷側にもつガレー船四、〇〇〇艘を所有しています。そして、ガレー船は航行する時、ほとんど全船が重量九ないし一〇アラテルの砲弾を自ら発射する(22)大砲一門を積載して

いて、ほとんど全船がその船尾と船首に非常に美しく金箔を押ししています。それは、私がある祭りに参集した五〇〇艘を見たようにです。その祭り(法要―訳者註)は、この国王の父が数年前に死去した日(命日―訳者註)に催されましたが、その父は彼の年下の息子に統治させたいと願望して死去しました。そして、その年上の兄弟の彼が当国の真の継承者であって、現在、統治している国王です。

彼は非常に戦争好きです。このため、彼は絶えず兵員を訓練して射つたり、たいそう美しい馬や象に騎乗したり、また数本の材木を使って一本の材木で他の材木を打ち鳴して、同じ時間内にいろいろな方法で船を漕がせました。

彼が住んでいる町は二一度半の緯度にあり、甚だ暑いところに位置しています。通例として、六月に微風が吹かないため土塀も城塞もありません。王宮以外の家々は屋根瓦で被われており、極めて強い、またよく細工された板で造られて籐や竹からなっており、藁で葺かれていて上階はなく、窓もありません。町には池がたくさんありますが、それは、家に火が点くのをこの水で早急に消すためです。いく度か五ないし六、〇〇〇戸の家が焼けています。しかし、四、五日で家はすぐに再び造築されます。町は非常に大きく、周囲は五、六レグアあり、同地に住む住民は数えられないほどです。

大きな、航行できる川が近くを流れています。それは一八レグアの距離で海に注いでおり、ひどく濁った水で、町全体がこれを飲んでいません。泉も井戸もなく、貯水池もありません。六月と十一月の末に河床が二度氾濫し、市街のほぼ半分が水浸しになります。しかし、こうした氾濫はほんの少しの期間続くだけです。

以上のことは、私が手短かにトンキンの国について思い出すことのできるすべてです。

(unacso) 南の季節風が終ると、私達は八月一八日<sup>(17)</sup>国王のガレー船二艘に伴われ、同地を出発して海までの川を下りました。国王は甚だ盛大な宴に私達を招いたあとで、イルマン・ジュリオ、私及び船長に様々な贈物を与えて、彼の財宝を見せました。私達は、私達の主であるデウスのお蔭で九月一六日無事にマカオに到着しました。

私達の主であるデウスが、この地の布教を開いて、(マカオ経由による「シナへの」道が閉ざされているために)同地を経てシナの内陸に甚だ簡単に入れて下さいますように。そのことについては、入国したある日本人達が、ある者達を通じて、またカイドゥム<sup>(Kaidum)</sup>という同じシナの一国で知られていることを私に話しました。そのカイドゥムは、トンキンから境界を接しているラオスへ行く途中で僅か四日隔たっているだけです。私が耳に入れたところによると、彼等は私達の聖なる教えを受け入れ、また無数の靈魂をこのトンキン国の悪魔の束縛状態から引き離すのに甚だ相応しい人々です。マホメットの奸計と印が入る以前に、これらの哀れな隣人達の魂を助けるために行くことです。彼等はパンを求めていきますし、また約束を破る者はおりません。

ジュリアーノ・バルディネッテ<sup>(20)</sup>

- 〔註〕
- (1) A写本では、「彼はまた喜劇俳優達や婦人達による舞踊に……」となる。M写本はA写本と同文であるが、「喜劇俳優達」の一語は不明扱いになっている。

(2) 二つの写本では、「その土地の人たちに」となる。

(3) アジュダ図書館写本により補う。

(4) *pareras* の意味については不明。

(5) アジュダ図書館写本では「fiz desdobar (肖像を)広げさせた」となる。

(6) 原文が「este 東」であるのに対し、二つの写本では「este 西」となり、写本の記載が正しいことは言うまでもない。

(7) 写本により補う。原文には「forte sua fidelidade」とあり意味不明。

(8) A写本では *Malayos caldeos*。M写本では *Malaisios caldeos* となる。

*caldeo* はセム族のカルデア人のことであり、彼等の居住圏は、ペロニア南部地方であった。写本作成者のアルヴァレスが *Malayos caldeos* を「イスラム教徒のマレー人」の意味で把握していたかどうかは不明である。

(9) 不詳。

(10) M写本は原文と同文であるが、A写本では「……de varias de prata 銀の様々な色からなる「像三体」……」となり、「黄金の像三体」の記載はない。

(11) 二つの写本では、「quatro mil, e quem dous mil 四〇〇〇、他の者は二、〇〇〇」となるが、原文は「quem mil, e quem dous mil あり者は一、〇〇〇、他の者は二、〇〇〇」となり、文脈から見て原文の記載に従った。

(12) 「アラテル arratel」は往時の四五九グラムに相当する。

(13) 国王鄭祖の父鄭松(平安王)は一六二三年に死去した。

(14) A写本では、「二〇度半」となる。実際には北緯二三度二分に位置する。

(15) M写本では、「七月」となる。

(16) A写本では、「窓もありません」の記載はない。

(17) A写本では、「八月一五日」となる。なおM写本は原文の記載に同じ。

(18) カイドゥムは中国・雲南省の<sup>(Yin Kan)</sup>一都市と思われる。

(19) A写本では、「na seita de Mafoma マホメットの悪い印」。M写本では、「na seita de Mafoma マホメットの悪い宗派」となる。

(20) A写本により補う。